

カビ爆弾

脳に巣くい生命も奪う

平和の象徴 ハトが投下

「あの子をカビにとられてしまったなんて……」と、母親は、医師の説明に、ただ、ぼう然としていた。

カビ。それは、パンにはえるだけではない。あなたの脳にはえることもある。

「信じられないかもしれませんが、だけど……、お子さんの脳はカビだらけでした」

まるで、軽石のように、ポツポツと穴があき、そのなかに、白い半透明のねばねばした寒天のようなものがつまっていた。

★初めは耳鳴りから

13歳のその男の子は、ひどい耳鳴りに悩まされて東大病院に入院した。

「脳のなかに、なにか、はれものができたのでしょう」と、そのとき、医師はいった。「脳しゅよう」という一応の診断で、治療が始まった。だが、病気は悪くなる一方。耳鳴りに加えて、食べものを吐くことが多くなった。うなじが硬くなり、ものが二重に見えるという出した。入院して半月ほどで、かれは、短い一生を終えた。

この子のいのちを奪ったカビの名は、クリプトコックス・ネオフォルマンズ。大きさは、5ミクロンから7ミクロン（1ミクロンは千分の1ミリ）。球状で、まわりは、寒天のようなぶあつい膜でおおわれている。その1個、1個は、小さくて目に見えない。たぶん、あなたの身の回りの空気中にも、何個が漂っていることだろう。そして、いま、あなたも、それを吸い込んでいるかもしれない。

「どういうわけか、このカビは、ハトのフンが代好きで……」と、北里大学の奥平雅彦教授(病理学)はいう。「ハトのフンを調べてみると、このカビが、実にたくさん含まれています」

★空気中漂い肺臓へ

ニワトリ、ツグミ、ホオジロなどのフンにもはえるが、どういうわけか、ハトのフンに断然多い。フンが乾燥するにつれて、空気中に漂い出す。そして、吸う息といっしょに、ヒトの肺のなかへ。人によっては、その後、血液中にもぐり込み、脳のなかに忍び込む。

「脳にたてこもると、そこで増えたり、減ったり、何年も何十年も行き続けているようですね」と奥平教授。カビがひどく増えなければ、軽い頭痛や吐き気程度でおさまっている。だが……

「からだが強ったときなどに、このカビは、一気にふえ、いのちを奪ってしまいます」

昭和33年から44年までに、わが国で解剖した遺体のうち、本当の死因はクリプトコックス症とわかったものが、253例もあった。「調べれば調べるほど、クリプトコックス症はふえています」と、病理学舎たちはいう。このカビのほか、黒色分芽菌とかは、水虫の原因である白せん菌とかが、脳に忍び込むこともある。

★特効薬見つからず

治療薬の開発は進められているが、副作用の問題などがあって、いまのところ、安全な特効薬はない。

「この病院にも、ハトが住みつきそうになりましたよ」と、奥平教授は、窓のひさしを指さした。そこには、ハトよけの金網がはりめぐらしてあった。

「ハトは平和のシンボルなどといわれていますけど、実は恐ろしいカビ爆弾を落とすのですよ」